

## 雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動

王 鼎

### Abstract

The students studying in Japan played an important role in the spreading of modern thought during the late Qing Dynasty. From the year 1898 to the Revolution of 1911, 49 kinds of magazines were published at home and abroad (domestic 18, abroad 31), among which 26 kinds were published in Japan. Besides, among the 26 magazines, ten were founded by the students that dispatched by different provinces of China. The ten magazines include *student community of Hubei Province*, *Zhishuo*, *Zhejiang Chao* (all founded in 1903), *Yunnan* (1906), *Sichuan*, *Henan* (all founded in 1907), *Guanlong*, *Xiasheng*, *Jiangxi* (all founded in 1908). Through this, we can find that students studying in Japan constitute a high proportion of the revolutionary movements and the thought of the Enlightenment during the period.

Based on this background, this study intends to analyze the influence that the students studying in Japan had on the relationship between Japan and China. As for research method, by revolving around *student community of Hubei Province*, which was published earliest and comparing with the magazines at the same period, this study tries to analyze the thoughts and activities of the students studying in Japan.

キーワード……『湖北学生界』 雑誌 清末留日学生

### はじめに

2015年度、日本学生支援機構（JASSO）によって行われた「外国人留学生在籍状況調査結果」<sup>1)</sup>によれば、日中関係が厳しく冷え込む現状にもかかわらず、日本に留学する中国人学生は依然として最も多く、留学生全体の45.2%を占めている。相互に理解しあう上で欠かすことができない「留学」だが、日中間で相互理解が進んでいることを双方で評価せず、政治外交関係だけがクローズアップされるのが現状である。過去から現在に至るまで留学生交流・教育の意味とは何かを問うことは、日中関係においては特に重要だと考えられ、過去の留学生の歴史を振り返ることは意義があると思われる。

中国人日本留学の歴史は、およそ120年前に遡ることができる。1896年に、当時の清朝政府の外交部門である総理事務衙門は、唐宝鏗ら13人を日本へ初めて留学させ、組織的留学生派遣の歴史が始まった。その後、留日希望者が増大し、1906年前後をピークに、1万人ほどの

留学生が日本で学ぶ空前の留学ブームの様相を呈した。これらの留学生は、清末中国における近代思想の普及に大きな役割を果たした。とくに、中国の国内外で留学生によって発行された諸雑誌は、西洋と日本の先進技術や学問を紹介し、帰国後要職に就いた留学生を中心にその影響は国内にも及んだ。

中国留日学生に関する研究は、清末を中心に数多くの成果を蓄積してきた。その中の清末における雑誌についての先行研究には、日本側では、主に実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年）、また、中国側においては方漢奇『中国近代報刊史』（山西教育出版社、1991年）などが近代中国で発行された雑誌の全体像を概観的に紹介している。それに対して、ある特定の一雑誌に焦点を当て、より詳細に分析しているものもある。たとえば、孫倩「清末留日学生思想と行動—雑誌『河南』を例として」（ソシオサイエンス、2014年）は、政治論説・文学評論の側面から河南留日学生が思想面において果たした役割を考察する研究であり、朴雪梅『『江蘇』の「女学論文（文業）」から見る清末における日本留学女子学生の女子解放思想』（『言葉と文化』、2013年）は、「儒教反対→女学振興→女権運動→救国」という女子解放の流れを解明した。また、『湖北学生界（漢声）』に触れた研究は、黄国華「清末第一個以省区命名的留日学生刊物—『湖北学生界』」（『歴史教学』、1980年）、宋徽『湖北学生界』与晚清湖北（『學術界』、2010年）などがある。その内容は、雑誌の概説、特徴、投稿された文章に対する分析と、革命思想の普及に果たした役割を論じている。

しかしながら、同時代に現れた雑誌間との相互関係について言及する研究は多くない。ここで本稿は、中国において最も早く刊行された『湖北学生界（漢声）』を主軸とし、直隸省・浙江省などの留学生が創刊した雑誌を比較しながら、清末湖北留日学生の諸活動および、湖北学生たちが日中関係にどのような影響を与えたのか、という視点から考えてみたい。

## 1 清末における留日学生による発行された雑誌の概観

前述した通り、中国の社会変革に重要な意義を持っている。清末における革命思想の普及には、中国の国内外で発行された諸雑誌が強い影響を及ぼした。辛亥革命前の1898年から1911年にかけて、合計49誌が出版されている。そのうち、中国国内で発行されたもの18誌、中国以外で発行されたものは31誌であり、特に日本で創刊された雑誌が26誌を占めていた<sup>2)</sup>。表1は、そのうち、各省出身の留学生によって創刊・編集された雑誌をまとめたものである。表1によると、革命思想の影響を受けた雑誌は合計10誌が存在していること、および1903年と1907～1908年に雑誌創刊の高揚期があったことが確認できる。

また、表1の示しているように、1903年に創設された雑誌の総発行所のすべては「清国留学生会館」（東京駿河台鈴木町18番地）となっている。この重要な拠点の前身は、1900年に結成された「励志会」という組織で、その会員には馮翼翬<sup>3)</sup>、曹汝霖<sup>4)</sup>、蔡鏗<sup>5)</sup>、章宗祥<sup>6)</sup>などといっ

た「亦楽書院」や「日華学堂」の出身者で多く占められていた。また、「勵志会」は公使館と華僑の援助をもとにして、留日学生間の交流を盛んにして、留日学生全体の結束力を固めるという目的で作られた。そして「勵志会」を母体として留学生史上最初の総合機関とされる「清国留学生会館」が創設された。『江蘇』と『浙江潮』の編訳出版の本部も当該施設内にあった。以上のことから、留日学生の活動が当時の革命運動と思想啓蒙活動に高い比重を占めていたことが覗われる。

表 1. 各省出身の留日学生によって創刊された雑誌

雑誌名	編集者	発行所	創刊年月日
『湖北学生界（漢声）』	劉成禺、李書城	清国留学生会館	1903年1月29日
『直説』	張繼		1903年2月13日
『浙江潮』	孫翼中、蔣方震		1903年2月17日
『江蘇』	秦毓鎰、張肇桐		1903年4月27日
『雲南』	楊秋帆、呂志伊	雲南雜誌社	1906年10月
『四川』	吳玉章、雷鉄崖	四川雜誌社	1907年11月
『河南』	杜潜、劉積学	河南雜誌社	1907年12月
『夏声』	井勿幕、楊銘源	夏声雜誌社	1908年2月
『閩隴』	范振緒、党積齡	閩隴雜誌社	1908年2月
『江西』	湯增壁	江西雜誌社	1908年7月

出所：張静廬『中国近代出版史料』第2編に基づいて筆者作成。

## 2 雑誌『湖北学生界（漢声）』について

### 2.1 雑誌の発行

『湖北学生界』は、「東西の学説を輸入し、国民の覚醒を起こす」という主旨で湖北籍の留日学生により、1903年1月29日に東京で創刊された月刊誌である<sup>7)</sup>。第6期から『漢声』と改名されるとともに、『旧学』という増刊も出されている。また、本誌は、清末における省の名義で発行された最初の雑誌で、大きな影響力があった。というのは、『湖北学生界』が出版された後、他の地域の学生たちも集まり、後に『直説』、『浙江潮』、『江蘇』といった各省名で発行される雑誌が次々と創刊されたからである。

販売ルートとしては、第1期と第2期は、東京と武漢、上海にそれぞれ一か所ずつ総発行所が設置され、第3期から湖北、上海、北京、天津、浙江、湖南、江蘇、江西に15の代理店を増設した。第4期の冒頭の部分に、「本社の販売所は3つに分かれている。まず、揚子江の上流では、武昌にある中東書社を総発行所とし、四川、湖南、江西、河南に支店を設けて販売する。揚子江の下流では、上海にある国民叢書社を総発行所とし、江蘇、浙江、福建、安徽に支店を設けて発売する。そして、北洋では、北京椿樹頭條胡同咸甯館、天津北洋官報局を総発行所とし、直隸、山東、山西、陝西に支店を設けて発売する」<sup>8)</sup>という記載がある。第5期になると、

さらに増え、販売所は合計 35 ヶ所になり（経路についての具体的な情報は本稿末の附録に記す）、販売地域はかなり広範囲に及んだと言える。

表 2 は、毎期の雑誌の奥付に掲載されている担当編集と販売概況に関する情報によって作成したものである。表 2 によれば、第 1 期から第 8 期まで一致している部分が多いが、若干異なる部分もあることが分かる。例えば、第 2 期以降、上海発行所は、「国民叢書社」（上海新聞新馬路餘慶里 19 号）となっている。編集及び発行代表者では、第 3 期では王璟芳の名前は消え、尹援一しか掲載されていないのに対して、第 4 期は「湖北同郷会雑誌報」、第 5 期から「寶燕石」になった。また、印刷者については第 3 期から、藤本兼吉（東京牛込区市ヶ谷加賀町 1 丁目 12 番地）となった。印刷所について、第 4 期になると、藤本兼吉と同じ住所である「秀英舎第一工場」と変わった。それから、第 6 期から雑誌名は、『漢声』と改名されると同時に、国内の総発行所も「昌明公司」（中国上海四馬路東華里）に変更されている。

表 2. 『湖北学生界』（漢声）に関する編集・販売情報

編集及発行代表者	王璟芳、尹援一（1～2 期）	
	尹援一（3 期）	
	湖北同郷会雑誌報（4 期）	
	寶燕石（5～8 期）	
印刷者	井上健二（1～2 期）	東京四谷区市谷片町 22 番
	藤本兼吉（3～8 期）	東京牛込区市ヶ谷加賀町 1 丁目 12 番地
印刷所	後藤活版部（1～3 期）	東京神田区表神保町 1 番地
	秀英舎第一工場（4～8 期）	東京牛込区市ヶ谷加賀町 1 丁目 12 番地
東京・発行所	湖北学生界社（1～5 期）	東京駿河臺鈴木町 18 番地
	漢声杂志社（6～8 期）	
湖北総発行所	中東書社（1～4 期）	武昌省城内横街
上海総発行所	中国少年報館（1 期）	上海四馬路胡家宅
	国民叢書社（2～5 期）	上海新聞新馬路餘慶里 19 号
	昌明公司（6～8 期）	上海四馬路東華里
北京総発行所	咸甯館（4 期）	椿樹頭條胡同
海外総経售処	廖振華（5～8 期）	横浜山下町 240 番

出所：『湖北学生界』・『漢声』から筆者作成。

1903 年発行の他雑誌の海外総発行所を比較すると、『直説』以外、『湖北学生界（漢声）』、『浙江潮』、『江蘇』、『遊学訳編』<sup>9)</sup>（1902）はすべて横浜にある「廖振華号」を代理店にしていた。この「廖振華号」は、廖冀朋という日本在住横浜華商の経営する店で、「清朝を打倒して漢民族による中国大陸の奪還」を主旨とする「三合会」の会所でもあった。また、廖は、孫文と同じ時期に広州の博濟医院に在籍していた人物である<sup>10)</sup>。ちなみに、『訳書彙編』<sup>11)</sup>（1900）、『国民

報』<sup>12)</sup>(1901)、そして『游学訳編』にも関わった「大阪・神戸益源号孫実甫」<sup>13)</sup>は、神戸華僑である孫滄のことを指している。孫は、汪康年や羅振玉とは平素から付き合いがあり、初期留学生の世話係として大きな影響力を持ち、後に留学生監督も担当した。つまり、『湖北学生界』のみならず、留学生によって日本で出版された雑誌は、日本在住華僑の力を借りて事業を進めていたと考えられる。

## 2.2 雑誌社の運営

湖北学生雑誌社の運営主体は、学生たちであったため、経費が当然問題となった。雑誌社の資金について、以下の4つ方法で調達しているのが確認できた。

### ① 湖北出身の留学生たちで共同出資

雑誌『開辦章程』によれば、「本報社は、湖北留学生有志が資金を集め百部先行発行し、一部日本円十円で基本金として毎月維持費を捻出する(別に章程あり)。毎年年末に精算をして会計が報告する。有志者は持ち株ごとに任務が与えられ、一株ごとに通年本雑誌一部が無料で送られる」<sup>14)</sup>と記載されている。つまり『湖北学生界』に関わる人々はすべて自発的に事業に参加し無報酬であった。

### ② 中国在住の「官紳」(官職につく地域有力者) または支援者からの寄付

同章程によれば、「若し我々の主旨に賛同し、経済的に援助してくれる内地官紳などの方が居れば、即ち本社の名誉賛成員とする。また、その寄付した金額により斟酌して、本社の出版雑誌また関係書籍が贈呈される(内地官紳如有熱心贊助款項者即行登載本報推為本社名誉成員并酌送本報暨本報副刊各書籍以酬高誼)」とある。それに加えて、第1期～第5期の最後頁には「創刊する際に、国内有志諸君により、熱心な贊助をいただき、多額の寄付金が寄贈された。ここに感謝したい(本社倡辦伊始荷蒙内地諸君熱心贊助惠寄多金僅此感謝)」という感謝の言葉もあり、創刊時は少なからず支援者がいたことが窺える。ここで、名誉賛成員の氏名、および具体的に支援金をどのぐらい寄付したのか、という点を表3から確認したい。表3は、『湖北学生界』の冒頭部分あるいは奥付に記されている内容に依拠して整理したものである。

表3. 名誉賛成員の一覧表

通貨	金額	期別在籍者氏名
捐英洋	一百圓	蘭修先生(4期)
捐日洋	一百圓	尹主政家楣・吳直刺立達(1期)
	伍拾圓	黃大令聯尤・中州張觀察・陽湖錢觀察(4期と5期)、喜觀察(5期)
	三拾圓	黃州沈主政(5期)
	二拾圓	廷大令啓・石司馬澆(1期)
	拾圓	鄧君文衡(4期と5期)、胡大令珍(4期)、王君文贊・劉大令煥堂(5期)
	伍圓	陳君嘉會(1期)、李和甫先生(4期と5期)
捐大洋	一百圓	黃太守邦駿(1期)
	三拾圓	方司馬悅魯(1期～3期)、吳君海(3期)

	二拾圓	王大令億年、吳君祿貞（1期～3期）、劉君樽（3期）
	拾圓	萬君廷獻、鐵君良、鄧君承拔、徐君傳篤、吳君茂節、常君文炳（1期～3期）、王君慕陶（3期）

出所：雑誌『湖北学生界』・『漢声』を参照し作成。

### ③ 雑誌の販売

雑誌購読代について、年間12部で大洋2元、半年6冊では大洋1元1角、1部大洋2角となっている。また、遠方の読者には、基本料金の上に郵送料金を追加する場合もあった。

### ④ 広告料金

広告の値段表は、1頁5元、半頁3元、最低1行4号17字で2角と定められていた。『湖北学生界』は、第1期だけでも4版ぐらい重ねて7000部以上出された<sup>15)</sup>。当時の水準では、新聞の発行数が5000部以上に達すると、大きな新聞と認定された<sup>16)</sup>ので、『湖北学生界』の発行規模は大きく、読者数も多かったと言えよう。以上まとめれば、創刊時の『湖北学生界』は学生による出資が主だったとはいえ、中国の国内外からの支援者を得て発行部数もある程度あり勢いがあったと言えよう。しかし、継続できるか否かは、支援者と読者をいかに獲得できるかにかかっていた。

## 2.3 『湖北学生界』から『漢声』への改名

『湖北学生界』は、創刊半年も経たずに『漢声』に改名され転機を迎える。この改名の経緯は、当時の時代背景によるところが大きい。周知のように、1903年4月に、ロシアが清朝政府と締結した『東三省交収条約』により、ロシアが東北地方から撤兵しなかったことをきっかけとして「拒露運動」が起こり、上海をはじめとして、中国各地で抗議運動が行われた。留日学生たちも藍天蔚などをリーダーとし、自発的に「拒露義勇隊」（後に「学生軍」）を組織して軍事訓練を始めた。後に清国による鎮圧と日本政府の干渉で解散させられたが、「形式を変えても精神を変えない」という方針で、「軍国民教育会」に名を改め、会旨を「尚武精神を養成し、愛国主義を実行する」と決めた。それに応じるため、雑誌（第4期と第5期）の「留学記録」というコラムに「学生軍縁起」と「軍国民教育会之組織」が連続で掲載され、「尚武」や「軍国民」といった「国民国家」や「ナショナリズム」の思想と結びつく言語の使用が目立ち始める。こうした近代的国家意識から生まれた国を守るという情熱が日清両国の政府に抑圧されたことにより、政府に対する学生たちの失望感は想像するに難くない。学生たちのナショナリズムはさらに満族・漢族という民族概念の刺激を受けて、より先鋭化するようになった<sup>17)</sup>。

実藤が述べているように、「当時の留学生は来日前、郷党観念は強いが、国家観念・民族観念は弱かった」<sup>18)</sup>ので、同郷学生によって創刊された雑誌が中心であった。したがって、第6期の冒頭に「睡獅の魂を喚醒し、揚子江が異族によって汚染されることを挽回する。それで祖国の失地を取り戻し、大漢民族の声を高揚させる（喚醒睡師之靈魂挽長江而濺異族之汚染兮以光復祖国而振大漢之天声）」という文章から、『湖北学生界』は「省界」という地方概念を突破し、

さらに湖北省そのものを中国と同一視し、漢民族の声を代表する意識に変化したと言えよう。こうした変化が『漢声』の改名につながったと思われる。

#### 2.4 雑誌に投稿した人物

本節では、『湖北学生界』に投稿した作者について紹介する。雑誌の目次を確認したところ、作者の署名入りの記事は、第1、2期のみで、第3期から作者の実名の代わりに筆名で、また無署名の記事となった。以下、雑誌に執筆した作者を紹介する<sup>19)</sup>。

① **張繼煦 (1876～1956)**：字儒俠、湖北省枝江市出身。1902年6月に官費生として弘文学院速成師範科に入学した。また、同様に「兩湖書院」に在学していた湖南出身の革命家黄興<sup>20)</sup>と同時期に派遣された。1905年に同盟会に加入した後、1906年に帰国し、湖北省学務公所実業科長に任命された。また、武昌高等師範学校（現・武漢大学）校長、教育部普通教育司長などを歴任した。

② **萬声揚 (1877～1940)**：字武定、湖北省黄陂県（現・武漢市黄陂区）出身。1902年5月に官費生として「兩湖書院」から派遣され、弘文学院師範科に入学した。翌年帰国し「昌明公司」という出版社を創設してから、雑誌出版拠点も武漢から上海に移転した。当該書店は密かに革命派の学生を養成し、秘密の連絡場所でもあった。辛亥革命後、湖北軍政府顧問、政事部文書局長、湖北省政府秘書長、国民政府陸海空軍総司令部武漢行営弁公庁科長などを歴任した。

③ **李書城 (1882～1965)**：字筱垣、湖北省潜江市出身。1902年に官費生として「経心書院」から派遣され、弘文学院速成師範科に入り、翌年卒業して帰国。1904年に再び日本に赴き、陸軍士官学校歩兵科（第5期）を経て、1908年に卒業して帰国した。留学中、「中国同盟会」の創設に奔走した。辛亥革命後、国民軍戦時総司令部参謀長を担当、黄興のもとで戦闘や仕事に従事した。なお、弟である李漢俊（1890～1927）が共産党の創設活動に関与したため、上海にある自宅（黄浦区新天地興業路76号）が中国共産党第一回代表大会の会場となった。1922年に上京し、総統府顧問、國務院参議、省政府委員兼建設庁長などを歴任。また、中華人民共和国成立後、初代農業部長に任じられた。

④ **但燾 (1881～1970)**：字植之、湖北省蒲圻市（現在の赤壁市）出身。1903年に「経心書院」から派遣され、弘文学堂速成師範科で学び、後に中央大学予科を経て英法科に入る。1905年同盟会に加入、司法部幹事を担当した。中華民国成立後、帰国して総統府秘書兼公報局長、国会参議院秘書長、国史館副館長などを歴任した。また、稲葉君山著『清朝全史』（中華書局、1915年）の翻訳、呂留良著『四書講義』の編輯・刊行することに携わるほか、数多くの著書が残されている。

⑤ **王環芳 (1876～1920)**：字小宋、湖北省恩施県（現・恩施土家族苗族自治州に属する恩施市）出身。1899年9月に官費生として日本へ留学、東京高等商業学校に入る。1903年4月に留学生たちが自発的に組織した「拒露義勇隊」に参加し、丙区四分隊長に務めた。また、清国留学生

会館会計幹事、『湖北学生界』の編集責任者を歴任。帰国後、湖北省政府の学務工所監督・梁鼎芬と巡撫・端方に買収されて革命情報を政府に漏らした。後に資政員議員、財政部次長を担当、財政印鑄局を創設。

⑥ **屈徳沢（1873～？）**：字恩波、湖北省宜昌市出身。1899年10月に東京帝国大学農科に学び、1905年に卒業して帰国した。中華民国成立後、湖北水利局長などを歴任した。

⑦ **范鴻泰（1874～？）**：字吉六、1899年10月に官費生として東京高等工業学校（現・東京工業大学）に入学し、1903年に卒業して帰国した。後に、湖北工芸学堂教習などを担当した。

⑧ **権量（1875～？）**：字謹堂、湖北省武漢市出身。1899年10月に官費生として東京商業学校（現・一橋大学）に学んだ。帰国後、京師大学堂商科監督、工商部秘書、交通部総長、任吉会鉄路督辦など歴任した。

⑨ **藍天蔚（1878～1921）**：字秀豪、湖北省黄陂県出身。1901年に官費留学生として日本陸軍士官学校工兵科（第2期）に入学した。1903年4月に、日本で中国人留学生による「拒露義勇隊」が組織され、藍は「学生軍」の総隊長を務めた。帰国後、湖北督練公所提調・湖北将弁高等師範学堂教習に就任するかたわら、密かに革命活動も続けた。

⑩ **劉成禺（1876～1953）**：字禺生、広東市番禺県（現・番禺区）生まれ、原籍は湖北省江夏県（現・武漢市に属する江夏区）出身。京師大学堂から1901年に日本に派遣された。1904年にアメリカ派遣留学生に選抜され、カリフォルニア大学に派遣された。辛亥革命後、帰国して1912年に民国第一書局を創設した。1922年に武昌高等師範大学で教鞭を執り、後に広東大元帥高等顧問、国民政府監察院監察委員、国史館総纂修を歴任した。著書には『太平天国戦史』、『洪憲紀事詩』、『世載堂雑憶』などがある。

⑪ **李廉方（1878～1959）**：字福廷、号蓮舫、原名歩青、湖北省荊門市京山県出身。1902年6月に「経心書院」から派遣され、弘文学院速成師範科に入った。在学中、社会改革、革命運動に積極的に参加したため、学籍を剥奪されるとともに、強制的に帰国させられた。その後、孫森茂の「武昌花園山」に身を寄せ、「花園山機関」という革命地下組織を成立した。辛亥革命後、武昌師範大学事務主任兼教授、山西省・湖南省教育庁長、湖南大学文学院院长・教授、中国中央文化教育委員など歴任した。また、著書『辛亥武昌首義記』、『廉方教育法』などが残されている。

⑫ **陳文哲（1873～1931）**：字象明、湖北省広済県（現・武穴市）出身。「両湖書院」より派遣され、1902年6月に官費生として弘文学院師範科に入る。その後の消息は不明。

⑬ **張鴻藻（1884～1938）**：字子漁、湖北省咸寧市出身。1899年10月に官費生として東京高等商業学校に入学した。その後の消息は不明。

⑭ **周維禎（1880～1911）**：字幹臣、湖北省襄陽市保康県出身。1902年5月に「経心書院」により官費留学生として日本に派遣され、弘文学院師範科に入り、翌年5月卒業。1911年、11月6日に、石家荘で呉禄貞とともに殺害される。



⑮ **金華祝 (1880～?)** : 字封三、湖北省黄陂県出身。1902年6月に官費生として弘文学院速成師範科に入学した。1903年4月卒業して帰国し、両湖総師範教員などを歴任した。

⑯ **程明超 (1880～1947)** : 字子端、湖北省黄冈市出身。1902年6月に「両湖書院」より官費生として派遣され、弘文学院師範科に入る。前述した雑誌発行者の「竇燕石」は程の変名でもある。のちに孫文の秘書長、中華民国教育部長などを歴任した。また、書道に優れて「東亜草聖」と呼ばれる。

⑰ **張孝移 (1881～?)** : 湖北省出身、1900年11月に四川官費生として同文書院に入学した。

⑱ **傅汝勤 (1878～?)** : 湖北省沔陽県 (現・仙桃市) 出身。

⑲ **王榮樹 (1878～?)** : 1899年に屈徳沢とともに東京帝国大学農科に入学した。

⑳ **王蓮 (1876～1940)** : 湖北省施南府出身、原姓は尹で、王璟芳の妻になり改姓した。湖北最初の留日女子留学生である。1902年に東京帝国婦人協会に入り、1904年に卒業して帰国した。

以上のように、雑誌に関わった人物には、1899年10月と1902年6月に派遣された湖北省出身の官費生が多くを占めていたことが分かる。また、湖北省における代表的な書院である「経心書院」および「両湖書院」から派遣された学生も少なくなかった。また、ほとんどの留学生は弘文学院速成師範科(8ヶ月)または師範科(1年)に入学した。

この「経心書院」<sup>21)</sup>と「両湖書院」<sup>22)</sup>はともに、湖広総督の張之洞によって創設された湖北省における最も伝統のある書院であった。そこから選ばれた留日師範生たちは、全省の秀才であったため、もちろん史学、経学など伝統的な学問に通暁し、さらにある程度の西洋の実学教育<sup>23)</sup>も受けていた。また、留学先の弘文学院速成師範科の授業科目は論理学、日本語、算術、地理、歴史、博物学、物理学、化学、図画、音楽、体操、心理学、教育学、各科教授法、学校管理法、日本教育制度、実地授業であった<sup>24)</sup>。科目の履修に際しては、出身省別でクラス分けされていた。このように、初期留学生を出身地域でクラス分けることによって、共通の意志・目的をもつ同郷人が集まり、グループが形成されたことは、学生諸活動の展開に大きな影響を与えたと思われる。

## 2.5 雑誌内容について

第1期から第8期までの雑誌目録を参照すると、主に、論説、学説、政法、教育、軍事、経済、実業(農学・工学・商学)、理科、医学、史学、地理、小説、詞藪(楚風集・楚言集)、雑俎(異聞雑記)、時評、外事、国聞、留学記録(湖北之部、各省之部、日風述聞)、附湖北調査部紀事などの項目で構成されている。そのコラムの設定からすると、内容は多岐にわたる。便宜上、表4にまとめた。

表4. 作者と執筆したコラム

門類	雑誌番号、題目と作者
論説	1期:「叙論」(張継煦) 2期:「学生之競争」(李書城)、

	3期：「論中国之前途及国民应尽之責任」 4期：「尊我篇・中国民族論」（緒言・第一節中国民族之定名） 5期：「敬告同郷学生」 6期：「原祖」 7・8期合冊：「論中国合群当自自治始」
学説	1期及び5期：「黄犁洲」（但燾） 6期：「湖北哲学」
政法	2期：「憲政平議」（樞量）
教育	1期：「教育關係国家之成立」（張繼煦） 2期：「中国当重国民教育」（万声揚） 3期：「国民教育」 4期：「教育与群治之關係」 6期：「家庭教育」
經濟	1期、2期、4期、6期及び7・8期合冊：「普通經濟学」（王璟芳）
実業 （農業）	1期：「世界農業一斑」（屈徳沢） 2期及び6期：「農学分類」（王榮樹）、 3期：「論中国農学之早於泰西」 4期：「論中国有農業無農学」 7・8期合冊：「論中国迄日有農業無農学」
実業 （工学）	1期、2期及び4期：「応用工学」（范鴻泰）
実業 （商学）	1期：「世界平和の戦争・発端」（樞量） 3期：「中国商業不發達之原因」 4期及び6期、7・8期合冊：「國際商業政策」
軍事	1期：「軍解」（藍天蔚） 3期：「軍国民思想普及論」 4期：「軍事与国家之關係」 7・8期合冊：「軍隊之精神」
理科	1期、2期、3期及び6期：「植物学」（屈徳沢） 7・8期合冊：「物理学」
医学	2期：「興医学議」（傅汝勤） 5期：「国民衛生学」
歴史・傳記	1期及び3期：「歴史広義」（劉成禺）、 4期及び5期：「中国民族主義第一人岳飛伝・発端」 5期及び7・8期合冊：「菲立賓亡国慘状紀略」、「菲立賓亡国慘状略」（伝記） 5期：「菲立賓亡国慘状紀略」、「中国民族主義第一人岳飛伝」 6期：「牢獄之英雄」（伝記） 6期および7・8期合冊：「史学之根本条件」 7・8期合冊：「亜米利加之大英雄哈密頓伝」（伝記）
地理	1期：「中国地理与世界之關係」（李歩青） 2期：「黄河」（李歩青） 3期：「地理与国民性格之關係」 5期：「揚子江」
小説	1期、2期及び4期：「日中露」（嘯園、栖溟） 5期：「血涙痕」 6期：「天半忠魂」 7・8期合冊：「燕子窩」（記事）、「陸沈痛」（伝奇）
時評	1期：「世界政策」（陳文哲） 2期：「最近之板垣伯」（周維禎） 3期：「俄人於西藏死支那與活支那」 4期：「痛黑暗世界」 6期：「内政外交二大争闘時代」
餘録	1期：「壬寅史」 3期：「剪辮易服説」（来稿）
文学	5期：「中国文学与群治之關係」
算学	7・8期合冊：「新算学」
傳奇	6期及び7・8期合冊：「揚州夢」
詞藪 （楚風集 ・楚言集）	1期：「東海放歌」（亜東鉄血生）、「雜感七首・雜詩二首」（施南女士王蓮） 2期：「支那女權憤言」（楚北英雄）、「閱法文支那変色図狂歌当哭・春日見紅梅」（楚囚）、「對雪」（質園）、「從軍樂」（蒲圻但照遺稿） 3期：「支那女子之愛国心」、「書憤・題漁隱図・詠蟬・雜詩二首・途中有感」（公侠） 「詠湖北学生界」（尚武生来稿） 4期：「渡美紀行詩」（檀香山通信）、「欧船録」（新加坡通信）、「自由吟」（楚狂） 5期：「新人篇」、「蹈海行有序」、「自由吟」（楚狂）、「游学日本道作」（楚囚）、 雜感（楚北英雄）、「愛国廬詩話」 6期：「渡美紀行詩」 7・8期：「哀湖北」、「幽燕紀行詩」（恨人）、「煙台・威海衛・燕京」（竹坪山人） 「游学日本憶耀章贈別什即次原韻・紀夢・除夕感懷・雜詩・史閣部」など（六岳）
雜俎	1期：「談奇」、「亡国之言」（張鴻藻、周維禎） 2期：「談奇」、「新算学」 3期：「思潮一勺」（生生）、「亡国之言」 4期：「思潮一勺」、「奴痛」 5期：「思潮一勺」、「奴痛」、「支那人之真影」 6期：「蘭心楼史話」、「奴痛」 7・8期「蘭心楼史話・記朱舜水先生」、「奴痛・記薛女士」、「航海茶談」、「說奴度」 「日人支那風俗論数則」、「詠鄭成功伝」（虎山先生）、「鄭成功伝叙」（宮崎来城）

外事	1期：張孝移、～8期 7・8期合冊：「日俄之戦争如何」
国聞	1期：国聞（金華祝）、～6期
留学記録	1期：「湖北同郷会縁起附章程」 2期：「同郷会紀事・湖北之部」、「破産游学」、「自備生陸続東来」 「雲南留学生談・各省之部」、「嗚呼支那人嗚呼支那人・日事述聞」 3期：「閩中旅行談」、「人類館之停罷・日事述聞」、「福建商品被列於台湾館」 4期：「湖北同郷会報告」、「日本大阪博覧会中国福建出品移出台湾館始末記」 「弘文学院学生退行校前後始末記」、「成城学校留学生罷運動会」 「広西電争」、「学生軍縁起」 5期：「軍国民教育会之組織」
附 湖北 調 査部記事	1期：「叙例」（程明超） 2期：「広済県令・内地来函本社定章在所必登以存公論」 3期：「大治県鉞山」・訳日本支那調査会「支那通商」 4期：「湖北各州県派定籌抵籤捐毎年應解数目表」（紙幅制限のため、5期に掲載） 5期：「湖北各州県派定籌抵籤捐辦法」
附録	7・8期合冊：「荊州同郷追悼朱君蘭該文」、「荊州同郷追悼朱君蘭該哀辞」

出所：『湖北学生界』・『漢声』の目録より筆者作成、なお旧字体を日本語常用漢字に改めた。

## 2.6 雑誌の廃刊

本節では、雑誌『湖北学生界（漢声）』が、僅か8ヶ月しか続けられなかった原因を探りたい。

第一には、資金の問題である。第6期の『漢声』には、「凡そ代金を送金して購う者は、郵便にて呈上し、直ちにその本誌第5期を送る。尚代金を送金して来ない者には、もともと定価にて請求したいが、社会風氣・民智を開くという目的があるため、今回は極力これを認めることにする。なお『旧学』を一冊送るので、足して半年分六冊の代金となり、ただ資本は甚だ微たるものゆえ、速やかに定価を納めるのを望み、以って資金繰りに資す」<sup>25)</sup>とはっきり書かれている。続く第7・8期合冊にも「雑誌代金未だ送金して来ない代理店または定期購読者には、これから郵送を停止させていただく。また、雑誌社が運営できないため、今までの未払い分を速やかに定価にて総発行所に納めるように願う」<sup>26)</sup>とより厳しい口調で書かれていた。同様のことは、同時期の雑誌『江蘇』また『浙江潮』でも発生しているので、滞納・未払いは常態化していたと思われる。しかも、第6期になってからは、寄付者もなく（表3を参照）、広告も少なくなった。掲載しているのは、ほとんど「昌明公司」、「浙江潮」と「游学訳編」といったような関係者による広告だけとなり、収益はなかったと考えられる。

第二は、留学生が日本で起こした清政府に反対する革命運動が盛んになり、その結果清政府からの締めつけが厳しくなったことである。当初日本留学を大いに推進した張之洞は、日本の革命運動に非常に警戒心を持つようになり、湖北籍の留学生が発行した刊行物に対して「雑誌を今すぐ停刊しろ。もし従わなければ、学費の補助を取り消したうえ、直ちに帰国させる」<sup>27)</sup>と強く警告した。その後、暫くして主要な編集者を湖北省に呼び戻すと、ほかの官費生らも留学経費を取り消されることを恐れて、革命活動を控えたことが予測される。こうして『湖北学生界（漢声）』は1903年1月に創刊して、同年9月21日に停刊となった。その後も出版事業が再開できず、僅か8ヶ月で幕を閉じた。

### 3 張之洞の反応と管理強化

雑誌停刊の1ヶ月後、つまり1903年10月には、張之洞が主導して「約束遊学生章程」十条、「奨励遊学卒業生章程」十条、「自行酌辦立案章程」七条が定められた。この3つの章程はすべて、清末における比較的、系統的な留学に関する法令である。

「約束奨励遊学生章程」については、留学生に対して学堂選択基準や、学業、品行等の面に関する管理基準を厳格にしたほか、「いい加減な評論を政治新聞に掲載したり公表したりすることを禁じている。論説の是非を問わず、学生の本分を背く行為（妄發議論、刊布関預政治之報章、無論所言是否、均厲背其本分）」などが規定され、学生に対する管理強化が加えられた。そして、「自行酌辦立案章程」は、学生を学堂に推薦する場合の、政治、法律、武備（軍事）三科目についての規定で、「それぞれ学生数が限定されるため、毎年若干名の学生を推薦すること。武備（軍事）は官費留学生でない限り、推薦することはできない。政治、法律といった二科目も官費留学生を優先的に推薦すること（宜分別限定名数、毎年只準保送若干名、武備一門非官派学生、不準保送。政治、法律兩門亦先尽官派学生保送）」<sup>28)</sup>と定め、自費生に対して厳重に審査することや政治・法律・陸軍という科目を学ぶ人数を制限し、反政府的な行動をとり社会秩序を乱す勢力の伸長を許さないという狙いがあった。最後に、「奨励遊学卒業生章程」は、日本の学堂あるいは大学などを卒業した学生に対し、具体的にどのような待遇にすれば良いのかという政策である。

この一連の政策からみれば、清朝政府が留日学生を随時監督する対策を立てたということは明らかである。官費生は、留学生費用が政府から給付されており、清朝政府が明確に禁じている革命運動に参加すれば給付の取り消しが考えられ、革命運動から遠ざかることも考えられよう。1903年は官費生が特に多く占めており、締めつけが厳しくなれば、当時留学生が創刊した『湖北学生界』（合計8期）をはじめ、『直説』（合計2期）、『浙江潮』（合計12期）、『江蘇』（合計12期）が、「短命」で終わったことは、締め付けの結果であることは明らかであろう。

### 4 湖北省の軍事科留日学生について

1896年6月、駐日公使裕庚と日本政府との交渉により、清国政府は、総理各国事務衙門の選考を通った13名の学生を日本に派遣した。このような状況のなかで、日本駐華公使矢野文雄<sup>29)</sup>の働きかけにより、清国は1898年9月7日に留日学生派遣するための最初の正式な政府公文書である『遵議遴選生徒遊学日本事宜片』を定めた。章程には「将臣衙門同文館の東文学生を数人酌派し、また南洋・北洋大臣、両広・両湖・閩浙にある各総督、巡撫にも諮って、今現在に設けている学堂の中から年少穎悟にしてほぼ東文に通ずる学生を選んで、官職名を与えて臣衙門に報告し、総理衙門より日本の公使に通知して引き続き派遣する」<sup>30)</sup>とあり、南洋・北洋大臣や両江、湖広、閩浙の各督撫に命じて、「同文館」の東文学生のほか、各学堂在籍中の日本語に通ずるものを選抜させようとしていたことが分かる。一方、張之洞は、姚錫光（1857～1921）

に日本の軍事および教育などについて視察させた後、100名の武備留学生を「成城学校」に派遣する計画を立てた。しかし、官費留学生に支給する資金が醸出できないため、結局は、徐傳篤（江蘇）、易甲鵬（湖南）、傅慈祥、萬廷獻、吳紹璘（湖南）、鄧承拔、杜鐘岷（貴州）、吳祿貞、文華（荊州駐防旗人）、高曾介（直隸）、劉邦驥、田吳焯、鉄良（荊州駐防旗人）、劉庚雲、顧臧（広東）、吳元澤、吳茂節（安徽）、盧静遠、吳祖陰、張厚焜（直隸）の20名を日本に派遣することを諮り、「武備学堂」に入学させ、勉強させることを許可した<sup>31)</sup>。

表3の『湖北学生界』に支援金を寄付した成員の、吳祿貞、萬廷獻、鉄良、鄧承拔、徐傳篤、吳茂節6名は、もともと「百名計画」により派遣された初期湖北留学生である。しかし、すべての物事が順調に進んだわけではなく、1898年9月21日に西太后が変法運動を弾圧し、留日学生の派遣もいったん中止せざるを得ない状態になった。しばらく清国は学生を派遣すべきかどうか躊躇していたため、次の派遣は延期となった。これにより延期となった留学生派遣は、同年12月に総理各国事務衙門から再度発表されて、1899年1月に学生たちを日本へ派遣した。

当時の湖北留日学生は「武備」を学ぶ人が多いという特徴がある。これは日清戦争後、日本陸軍参謀本部の対華政策および、外務省と軍部の思惑もあると考えられる。その「外務省文書」によれば、「我が国ノ感化ヲ受ケタル新人材ヲ老帝国内ニ散布スルハ、後我勢ヲ東亜大陸ニ樹植スルノ長計ナルベシトノ次第ヲ茲ニ陸軍セバ、其武事ニ従フ者ハ日本ノ兵制ヲ模倣スルノミナラズ軍用器械等ヲモ我ニ仰グニ至ルベク士官其他ノ人物聘用スルニモ日本ニ求ムベク清国軍事ノ多分ハ日本化セラルルコト疑ヲ容レズ」<sup>32)</sup>と書かれている。さらに、1903年以前は、陸軍士官学校に入学したい留学生に対しての日本語予備教育機関は「成城学校」であった。1903年以降は福島安正<sup>33)</sup>の提唱により創設され、参謀本部に属している「振武学校」に移った。このことから、日本陸軍が清国でより積極的に行動できるように、軍事教育を通して親日派を養成しようというねらいがあったと言えよう。

上述した初期湖北省留学生20名の中の張厚焜は、張之洞の孫で「成城学校」のかわりに「日華学堂」に入学する予定だったが、紆余曲折を経て、結局は「日華学堂」に入らず、学習院に入学することとなった<sup>34)</sup>。彼以外の19名は「成城学校」での予備課程を終了した後、陸軍士官学校に進学した。陸軍士官学校には、砲兵、騎兵、歩兵などのコースがあった。吳茂節、易甲鵬、吳元澤、劉庚雲、鉄良、高曾介、吳紹璘、吳祖陰は歩兵科に入り、吳祿貞、杜鐘岷は騎兵科に、盧静遠、劉邦驥、文華、萬廷獻は砲兵科、それから鄧承拔、顧臧は工兵科に入った<sup>35)</sup>。ここで1年半の軍事教育を受けた後、見習士官として近衛歩兵第三聯隊、近衛騎兵聯隊、近衛歩兵野戦砲兵聯隊、近衛工兵大隊といった各連隊に配属され、半年後に士官資格が授けられた<sup>36)</sup>。成城学校から陸軍士官学校進学というのは一種の人材育成ルートであった。

湖北省留日学生は、1898年から1901年まで、実業科（農・工・商）を習う者以外、主として軍事科を志願した。その後、1902年になると、弘文師範科と速成師範科に入学する人が増加してきた。1903年から1904年にかけては、陸軍と弘文学院の師範科・普通科が依然として最

も多いが、その次は法政速成科となる<sup>37)</sup>。陸軍留学生の派遣が圧倒的に多かったのが分かる。一方、1900年から1911年までの陸軍士官学校の卒業生は、9期までで657人に達した。そのうち、軍事教育に従事した者は157人で約15%を占めている<sup>38)</sup>。また、中国における最初の正規陸軍軍事学校とされる「保定陸軍軍官学校」の前後8名の学長の内、蔣方震（1882～1938）、曲同豊（1873～1929）、楊祖徳（1880～1919）、賈徳耀（1880～1940）、孫樹林（1880～1948）といった5人は陸軍士官学校の卒業生であった<sup>39)</sup>。さらに、卒業生で「北洋士官三傑」と呼ばれている呉禄貞、藍天蔚、張紹曾<sup>40)</sup>のうち、呉禄貞、藍天蔚はともに湖北出身で、『湖北学生界（漢声）』にも深い関わりがあった。

## 5 呉禄貞、藍天蔚について

呉禄貞（1880～1911）は、湖北省雲夢県生まれ、字は綬卿。15歳の時に湖北新軍工程營に入り、軍事訓練を受けた。1897年、張之洞により創設された「武備学堂」の学生となった。1899年1月、選抜されて日本に留学し、「成城学校」の第一期として入学した。1901年には、陸軍士官学校騎兵科に学ぶ。留学中の1900年に秘かに帰国し、漢口で唐才常がリードした自立軍の蜂起を積極的に支持したのは注目に値する。しかし、武装蜂起前に発覚して唐才常以下20名が処刑された。その後、再び日本に逃げ戻って訓練を受け続けた。1902年に陸軍士官学校を卒業し、帰国した。一方、藍天蔚（1878～1921）は、湖北省武漢市生まれ、1896年に新軍工程營に入り、1897年に湖北武備学堂に入った。その時に、呉禄貞を相知った。1900年に成城学校二期生として来日、1902年に陸軍士官学校工兵科に入学した<sup>41)</sup>。1903年に、同郷湖北留学生とともに雑誌『湖北学生界』を創刊し、数次にわたって軍事コラムを担当した。具体的に言えば、第1期の「軍解」、第3期の「軍国民思想普及論」、第4期の「軍事與国家之關係」、第7・8期合冊の「軍隊之精神」が掲載されている。4つの軍事コラムを分析すると、湖北省の留日学生は、軍隊建設の必要性を意識し、体系的な陸軍海軍を建設しようとしたこと、日本の軍事教育体制を模範として、中国の予備将校学堂の設立を計画したことや、同郷の湖北人に軍隊に入り、国家の富強を実現しようと呼びかけたことが分かる。

1903年に清国政府は、全国の新式陸軍を再編することを急務とし、各省の軍制を再編するために、北京に総理練兵所を、また各省に督練公所を成立させた。当時の直隸総督袁世凱は、練兵大臣で自ら管轄する北洋新軍を中央軍、各省の新軍を地方軍とした。また、第一、二期の陸軍士官学校の卒業生の多くが、中央政府に任用された<sup>42)</sup>。呉禄貞も武漢に帰ってしばらく武備普通学堂の教習を務めて後、1904年5月に練兵処軍学堂訓練科馬隊監督として中央政府に呼ばれて上京した。それに対して、藍天蔚も北京総理練兵場より招かれたが、張之洞に説得され、湖北省のため尽くすべきだと考えて湖北督練公所に残り、新軍第8鎮(師団にあたる)第32標統帯となった。後に第2混成協(旅団にあたる)の協統に昇進した。1911年の辛亥革命勃発まで、新軍85名の協統のうち27人は士官学校の出身であり、31.7%を占めていた<sup>43)</sup>。しかし、各省

で編成した新軍の存在がそれぞれ政治的な傾向も持つようになった。このことについて、舒新城は「現在軍事権力を握っている軍人は、10のうち7、8人の名前が、日本の陸軍士官学校の同窓録と振武学校一覧に載っている。中国において軍閥がこんなのにさばることに対して、日本への陸軍留学生らは大部分の責任を負うべきである」<sup>44)</sup>と指摘している。

二人とも在日中から清国政府の無能に失望し、排満意識が強く、多くの留日学生に革命思想を宣伝した。その結果、留学生間の交流が活発になり、共闘できる団体の発生を促した。このように、学習や生活上のことについて助け合い、さらに、情報を収集したり拡散したりできるような「同郷会」が数多く結成された。「興中会」(1894年結成)、「華興会」(1903年結成)および「光復会」<sup>45)</sup>(1904年結成)は、それぞれ広東省、湖南省、浙江省出身の華僑や留学生らなどを主体とした同郷組織であった。1905年8月に、東京で前述した三つの団体が合併して「中国同盟会」となった。当時、参加者863人のうち、湖南省出身者は157名と最も多く、次いで湖北省の106名であった<sup>46)</sup>。このことから、張之洞が治めた湖南・湖北出身の学生が積極的に革命思想を宣伝し革命活動に参加する傾向があったのは明らかである。

## むすびに代えて

本稿の前半では、清末における湖北省の留日学生が創刊した雑誌『湖北学生界(漢声)』に焦点をあて、雑誌の創刊背景、編集社の構成および運営、掲載された論説と関連人物を明らかにした。また、これを浙江籍・直隸籍の留日学生によって創刊された『浙江潮』・『直説』と比較し、同時代に現れた雑誌の相互関係を解明することを試みた。後半では、廃刊の原因、張之洞によって策定された一連の管理強化政策を分析した。さらに、雑誌の編集・運営にも参加した呉禄貞と藍天蔚を中心に、湖北省軍事科留日学生の行動について考察を行った。

清朝政府は「新政」に乗り出したが、北京練兵場のリーダーであった袁世凱や湖広総督を長年務めていた張之洞などは自分の勢力を拡大するため、人材養成に励んだ。当時、北京練兵処が張之洞の力を削減しようとする思惑があり、湖北省の帰国軍事科留日学生を北京練兵処の監督につかせ、あるいは専司を任せたりして破格的扱いで有能の士を登用した。ただ、彼らは袁世凱に重要な地位に用いられつつある一方、秘かに活動し続けていた。その結果、湖北省の学生や湖北新軍の一部も革命思想を持ち、革命派を支持するようになり、辛亥革命の基礎を作ったと考えられる。

なお、紙幅の制限により、湖北留日学生が政治・外交を関係付ける重要な役割を担っていたことを十分に論じることはできなかった。この点について今後の課題としたい。

## <注>

- 1) 独立行政法人学生支援機構『外国人留学生在籍状況調査結果』、2015年、4頁。
- 2) 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年、420頁、張静慮『中国近代出版史料』第2編、群聯出版社、1954年、297～315頁。
- 3) 戢翼翬(1878～1908)：湖北出身、東京専門学校（現早稲田大学）卒業。科挙進士に及第。1900年、唐宝鏗と共に日本語教科書『東語正規』を出版。日本書籍翻訳出版社を設立。下田歌子と共に上海に出洋学生編集所を設立。同年、唐才常の蜂起に参加。1908年、西太后が光緒帝を廃する際、新聞記者を呼び批判会見しようとしたため湖北省に帰されたが、後に湖北省で官職に就く。
- 4) 曹汝霖(1877～1966)：上海出身、日本の早稲田大学卒。袁世凱と段祺瑞政府の要職を歴任し、1919年に起こった五四運動の際、親日派売国官僚として攻撃され罷免された。1966年8月4日アメリカで死去。
- 5) 蔡鏗(1882～1916)：湖南省出身、梁啓超に学び、日本の陸軍士官学校に留学し、帰国後、雲南で新軍を養成。1911年に雲南都督となり、袁世凱の帝政復活運動に反対。結核治療のため来日したが、福岡で客死。
- 6) 章宗祥(1879～1962)：浙江省出身、杭州の「求是書院」より派遣され「日華学堂」で日本語等を学ぶ。その後、東京帝国大学法科大学を卒業。中華民国成立後、袁世凱政権の大理院院長、司法総長などを務め、段祺瑞内閣でも司法総長、農商総長を兼任した。1916年駐日公使となり、1919年五四運動で売国奴として攻撃され、免職となった。1962年に上海で死去した。
- 7) 『湖北学生界』は、毎月の朔日（陰暦で、毎月の第1日）に発行された月刊雑誌である。
- 8) 『湖北学生界』の第4期には、「本報総售処分三大路；長江上游為一路、以武昌中東書社為總發行所、四川、湖南、江西、河南由此分派；長江下游為一路、以上海国民叢書社為總發行所、江蘇、浙江、福建、安徽由此分派；北洋為一路、以北京椿樹頭条胡同咸甯館、天津、北洋官報局為總發行所、直隸、山東、山西、陝西由此分派」と記されている。
- 9) 『游学訳編』は、1902年11月16日に湖南の留日同郷会によって創刊された雑誌である。楊度、周家樹、陳潤霖、黃興、張孝准などが編輯者として名を連ねている。
- 10) 馮自由『革命逸史』第3集、商務印書館、1965年、3頁
- 11) 『訳書彙編』は、1900年12月6日に東京で留日学生によって創刊された最初の雑誌である。主に欧米・日本の名作を翻訳して民権思想を宣伝した。編集者は戢翼翬、楊廷棟、楊蔭杭、雷奮などの初期留日学生である。
- 12) 『国民報』は、1901年5月10日に「清朝打倒、保皇反対」を目的として創刊された雑誌である。編輯者には、戢翼翬、陳翔雲、秦力山、楊廷棟、馮自由などがいる。
- 13) 孫滄(1858～1935)字は実甫、本籍は浙江省。上海から日本に渡り、1880年代に大阪川口で益源号を創立した。また、1897年から1900年にかけて浙江省出身留学生の監督を務めた。なお孫滄については、併せて高知市立自由民権記念館編『山本憲関係資料目録』2011（平成23）年、を参照のこと。
- 14) 「湖北学生界下開辦章程」の第四條経費一、本報現由湖北游学同人集資百份先行開辦以日幣十元為一份（一人任多份者聽）作為基本金並毎月酌出維持費（另有章程）每年終結算一次由會計報告同人按股分任每股分任每股常年送本報一份不取報費」
- 15) 『湖北留學生界』第4、5期、湖北特別大広告。
- 16) 華中師範大学中国近代史研究所『辛亥革命与20世紀中国』湖北人民出版社、2001年、525頁。
- 17) 李曉東「軍国民考」、82頁。大里浩秋・孫安石編『近現代中国人日本留學生の諸相—「管理」と「交流」を中心に—』（御茶の水書房、2015年）に収録されている。
- 18) 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年、512頁。
- 19) 周綿編『中国留學生大辞典』南京大学出版社、1999年。陰山雅博「宏文学院における中国人留學生教育について」学習院大学史学会、1987年。清国留學生会館「清末留學生会館第一次報告」（1902年10月）、「清末留學生会館第二次報告」（1903年3月）より整理し、筆者が作成した。
- 20) 黃興(1874～1916)、湖南省出身。武昌の「兩湖書院」を卒業後、日本に留学。帰国して華興会を結成し、1904年の武装蜂起を企てたが発覚、再び日本に亡命。宮崎滔天を通じて孫文らと交流、華興会と興中会を中心に中国同盟会を結成した。辛亥革命後は戦時総司令として防衛戦を指揮したが、革命派の対立などでアメリカに亡命し、第三革命の資金集めに尽力した。1916年に帰国したが、過労のために病死。
- 21) 田正平『留學生与中国教育近代化』、広東教育出版社、1996年、75～76頁。「経心書院」は当初の授業科目は、経解、史論、詞賦などがあった。日清戦争後、「中学為体、西学為用」の新しい経営方針の採用し、伝統の「経史辞章」を中心とするものから「中西結合」的なものに変化した。
- 22) 吳貽谷編『武漢大学校史』武漢大学出版社、1993年、3頁。「兩湖書院」は1886年に建てられ、当時の授業科目は、経学、史学、理学、文学、算学、経済学などの西洋的な実学が設けられたため、地元の多くの商人子弟を集めた。



- 23) 西洋実学科目とは、伝統的な四書五経、史論、古典詩賦に対して、天文、格致（物理）、算学、体操などの科目のことを指している。
- 24) 船寄俊雄、邵艶「清末末期における留日師範生の教育実態に関する研究：宏文学院と東京高等師範学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』10巻2号、2003年、81頁。
- 25) 6期の湖北学生界広告には「凡寄報資來購者飛郵呈上不敢刻停其有寄上本報五期尚未寄報資來者本応作零售価算本社為開通風氣起見極力原諒仍寄舊学一冊足成半年惟資本甚微望速交定価以資周転」と書かれている。
- 26) 7・8期合冊の本社特別広告には、「雑誌第六期尚未寄資來者恕不統寄間以前数期仍作零售数計算所望代辦及定覽諸君速將全価交総發行所以資用転」と記載されている。
- 27) 『張文襄公全集』第5巻、文海出版社、1963年、3410頁。
- 28) 同上、奏議、第61巻、「奏籌議約束鼓勵遊学生章程並清單」。
- 29) 矢野文雄（1850～1931）は大分県生まれ、龍溪と号す。『経国美談』や『浮城物語』で知られる小説家で、1897年に大隈重信外相のもとで駐華公使に任命された。その後、『郵便報知新聞』社長、宮内省式部官、大阪毎日新聞社副社長などを歴任した。野田秋生『矢野龍溪』（大分県教育委員会、1999）に詳しい。
- 30) 「遵議遴選生徒遊学日本事宜片」（1899）、『約章成案匯覽』（1905）乙篇、巻32下、北洋洋務局、17頁によると、「将臣衙門同文館東文学生酌派數人、并咨行南北洋大臣、両広湖広、閩浙各督府、就現設各学堂中遴選年幼穎悟粗通東文諸生、開具衙名、咨報臣衙門、知照日本使臣陸續派往」と書かれている。
- 31) 成城学校校友会編『会員名簿』、軍人会館出版部、1935年、545～546頁。
- 32) 『外務省文書』機密第41号、河村一夫「駐信公使時代の矢野龍溪氏」『成城文芸』46号、1967年、65頁。
- 33) 福島安正（1852～1919）は、長野県生まれ、1887年に陸軍少佐に昇進し、1892年帰国の際、ベルリンからシベリアを騎馬で単独横断した。日露戦争では、満州軍参謀を務め、のち参謀次長、関東都督となった。著書に『伯林より東京へ単騎遠征』などがある。
- 34) 「日華学堂」の堂監である宝閣善教の個人的な日記である『行雲録』によれば、「湖北道台張斯拘并に張之洞の孫張坤申等、檣原氏と共に來堂。…張坤君も愈々近々の中当学堂に入学する事となりぬ」（1899年1月21日）とあることから、「日華学堂」は確かに張之洞の孫の張厚琨を引き受けようとしていたことが分かる。『時事新報』（1899年8月6日）の『清国留学生の現在及び将来』には、「留学生中高貴の出にして年齒尤も若きは張之洞總督の愛孫にして目下近衛公の監督に属し学習院に在学せり」という記事がある。
- 35) 沈雲龍編『近代中国史料叢刊続編』第37輯「日本陸軍士官学校中華民国留学生簿」、台北文海出版社、1977年、2～7頁。
- 36) 高明珠「日本留学生の歴史的貢献からみた清末留学生派遣政策の效果」『同志社政策科学研究』14、2012年、102頁。
- 37) 苑書義・孫華峰・李秉新編『張之洞全集』、河北人民出版社、1998年、3986頁による。
- 38) 姜新「留学帰国人員と民国軍事教育」『河北師範大学学报』第34巻第3号、2011年、132頁。
- 39) 『保定陸軍軍官学校』、保定市文史資料研究委員会、河北人民出版社、1987年、38頁。
- 40) 張紹曾（1879～1928）は、直隸省順天府大城県の人。1896年に北洋武備学堂に入学した。卒業後、湖広總督張之洞の官費援助を受け、日本に留学した。陸軍士官学校第1期砲兵科で学んだ。同期の吳祿貞と第2期の藍天蔚とともに「士官三傑」と称された。帰国後、袁世凱の下で砲兵隊の士官として登用された。以後、順調に昇進を重ね、北京政府、直隸派の軍人となり、さらには國務總理を務めた。陳寧生『民国人物伝第11巻』（中国社会科学院近代史研究所編、中華書局、2002）に詳しい。
- 41) 郭榮生「日本陸軍士官学校中華民国留学生簿」、沈雲龍編『近代中国史料叢刊続編』第37輯、臺北文海出版社、1977年、6頁、『辛亥革命在湖北史料選輯』湖北人民出版社、1981年、82頁を参照して整理した。
- 42) 蘇雲峰『中国現代的区域研究：湖北省 1860～1916』中央研究院近代史研究所專刊41、1981年、254頁。
- 43) 尚小明『留日学生与清末新政』江西教育出版社、2002年、64頁。
- 44) 舒新城『近代中国留学史』中華書局、1933年、212頁。
- 45) 興中会とは、1894年、孫文がハワイで広東出身の華僑を中心に組織された反滿民主革命団体。華興会とは、1903年末頃黃興らにより湖南留日学生を中心に長沙で結成された革命団体である。光復会とは、蔡元培・章炳麟らが1904年結成した革命的秘密結社。翌年、中国革命同盟会の成立に加わったが、後に同盟会に対抗。
- 46) 中華民国開国五十年文献編纂委員会『革命之倡導與發展—中国同盟会—』正中書局、1964年、163頁。

附録：『湖北学生界（漢声）』第1～8期販売経路一覧表

省・県	都市・所在地	発行所	期号
1	神奈川県	横浜市山下町 240 番	廖振華
2	湖北省	武漢市	横街中東書社
3			文明書室
4			謙吉土莊
5			漢口日報館
6			青石橋総派報處
7		武穴市	朱復成
8		黄州区	殷豊恒号
9		团風県	恒益号
10		宜昌市	南正街令原書室
11		上海市	新聞新馬路餘慶里 19 号
12	東華里		昌明公司
13	三馬路		蘇報館
14	四馬路		胡家宅少年報館
15			新民叢報支店
16			作新社
17	望平街		開明書店
18			中外日報館
19			商務印書局
20	棋盤街		啓文社
21			新中国図書社
22	洋涇鎮		兩宜齋
23	北京市	椿樹頭條胡同	咸甯館
24			有正書局
25			公慎書局
26	浙江省	杭州市	白話報館
27		寧波市	文明書社
28		平湖市	文海閣
29	江蘇省	南京市	東单牌樓啓新書局
30			夫子廟明達書莊
31		無錫市	務實学堂帳房
32	四川省	成都紗帽街	少年学社
33		南紗帽街	安定書屋
34		桂王橋北街	傅崇傑君
35			吳達權君
36	学道街	徐伯庚君	
37	天津市		北洋官報局
38			李茂林
39	江西省	南昌市	派報處
40	広東省	衣上街	廣聞報社
41	山西省	太原市	武備学堂毛昌年先生
42	湖南省		鈇務總局
43	直隸省		官書局

主指導教員（麓慎一教授）、副指導教員（柴田幹夫准教授・武藤秀太郎准教授）